

される理論的枠組みは、これまで行ってきた「環境哲学」や「〈生〉の分析」のアプローチと連結できるものにならなくてはならない。したがって本書では、そうした成果も取り入れながら、本書なりの他者論を展開しつつ、「人間的〈関係性〉」を読み解く理論的枠組みを独自の形で再構築していくことにしたい。

(2) 「人間的〈関係性〉」の基本構造としての「〈我－汝〉の構造」

理論的枠組みを構想していくにあたり、最初に問わなければならないのは、まず「自己」とは何か、「他者」とは何かという問題である。その最も端的な説明は、“自己”とは「私」という存在のことを指しており、“他者”とは「私」ではない（他の）存在のことを指しているというものだろう。つまりわれわれは、「私」という形で特定可能な何ものかのことを“自己”と呼び、そうした自己とは区別される何ものかのことを“他者”と呼んでいるのである。

一般的に“他者”と言う場合、われわれは友人や同僚など、日々接触する「現存する顔見知りの人間」のことを連想するかもしれない。実際こうした他者は、日常生活実践においてきわめて重要な位置を占めている——本書ではそれを「中核的他者」と呼び、あらかじめ区別しておくことにしよう——。だが先の定義によるならば、人間存在にとっての他者とは、それ以外のものをも含んでいる。例えば自身は認知しているが、実際には接触することが難しい「現存すると仮定できる人間」、曾祖父母から1000年前の名もなき兵士に至るまでの「過去に生きた人間」、それとは反対に、数世紀先の世代をも含んだ「未来に生きるだろう人間」、それどころか物語の主人公といった「空想上の人物」、古来より信仰の対象となってきた「神」、生活をともにしてきた「人間以外の生物」、そして浜辺で拾った小石のような「無生物」でさえ、ときに他者として現前しうるからである。

特定の存在が“他者”として現前するのは、それが“自己”に対して意味を持って区別されたときである。そして“意味がある”ということは、そこに何らかの〈関係性〉が成立しているということに他ならない。つまり「現存する顔見知りの人間」にはじまり、浜辺の小石のような「無生物」に至るまで、あ

らゆる存在は、自己に対して「意味のある〈関係性〉」を成立させ、それによって“他者”となるのである。ただし、そこで〈関係性〉が持つ“意味”の内実は、決して自己によって一方的に見いだされるものではない。例えば他者は、自己とは区切られる存在であるがゆえに、自己に対して差異性や異質性を必ず含んでいる。そして見方を変えれば、他者は自己に対して差異性や異質性を持って「語りかけてくる」のであり、自己が見いだす意味とは、そうした他者に対する応答であるとも言えるからである。例えば「私」という存在にとって、亡き「祖父」は「意味のある〈関係性〉」によって結ばれた他者だと言えるかもしれない。このとき“意味”を見いだしているのは確かに「私」であるが、それは同時に祖父という存在が、私に対して否応なく投げかけてくる何かを持っているからでもあるはずである。吉田健彦の言葉を借りれば、「我々の眼前に、或る他者が徹底して固有のものとして立ち現れ、避けようもなく我々に迫る」、その「迫真性」に対する応答こそが、〈関係性〉の“意味”をわれわれに呼び覚ましているのである⁽⁷⁾。

したがって、われわれが〈関係性〉の意味を問題とするとき、そこではあくまで自己と他者との相互作用が前提とされなければならない。さらにこのとき、他者が他者である根拠となる「他者性」の表現として、そこに単なる差異性や異質性を指摘するだけでは不十分だと言えるだろう。例えば他者という存在が、ときとしてわれわれに“怖れ”を伴った感情を呼び起こすのはなぜなのだろうか。それは、そこに単なる差異が存在するからではない。それは他者が差異を伴うがゆえに、決してそのすべてを計り知ることができないものとして、つまり「意のままにならない存在」として対峙してくるからに他ならない⁽⁸⁾。先の例に即して言えば、まず亡き「祖父」は、「私」にとって「意味のある〈関係性〉」によって結ばれた他者であった。それゆえ「私」は、「祖父」の人生と対峙することによって、自身の人生をも顧みることができる。だが他方で、「祖父」は決して「意のままになる存在」ではない。「祖父」の人生のなかには、「私」が望まない過去があるかもしれないし、「私」にはその不本意な事実を消すことなどできない。しかしそうした側面をも含む形で、いやむしろそうした側面が含まれているからこそ、「私」と「祖父」の〈関係性〉には、重厚な“意

味”が形作られるとも言えるのである。

本書では、一連の自己と他者との相互作用のことを、「**〈我-汝〉の構造**」と呼ぶことにしたい⁹⁾。この「**〈我-汝〉の構造**」は、自己 = 〈我〉と他者 = 〈汝〉が織りなす「意味のある〈関係性〉」のことを表し、これからわれわれが「人間的〈関係性〉」を考察していく際の出発点となるだろう。そしてわれわれは、ここで本書における他者の概念を、以下のように再定義することにしたい。すなわち**〈他者存在〉**とは、自己にとって本質的に「意のままにならない存在」であるとともに、「意味のある〈関係性〉」を通じて「**〈我-汝〉の構造**」が成立しうるすべてのものである、というようにである。

それでは**〈他者存在〉**に対する自己、すなわち**〈自己存在〉**とは改めて何を指すものなのだろうか。われわれは先に、自己を「私」という存在であると仮定したが、それでは「私」とはそもそも何を指しているのだろうか。例えば自己 (self) と自我 (ego) とは、同じものだと言えるのだろうか。ここでは「自我」を、ひとまず「私」によって意識されている「私」のことであるとしておこう。しかし自己には“無意識”、つまり意識されていない「私」の存在が含まれている。また自我である「私」の意識は、身体という物理的な基盤によって形作られているが、自律神経や衝動、生理的な反射のように、自己であるはずの“身体”もまた、ときに「意のままにならない存在」となるだろう。このことは、われわれが通常自己として認識しているもののなかにも、ある種の「他者性」が存在しうることを示唆している。

また人間存在は、自我が形成される以前から、ある種強制的にこの世界に産み落とされ、特定の時間と場所とにおいて配置されることによって「私」となっている。人間は、ここで性別、性格、才能、容姿——あるいは特定の“遺伝的疾患”さえも——を含む自らの身体を選択することができなければ、肉親や隣人たち、あるいは将来的に意味を持つだろう国籍、母国語、文化的伝統といったものを選択することもできない。このことは「私」という存在が、「私」としてあることに先行して「意のままにならない」ものたちと出会い、まさにそうした**〈他者存在〉**の直中において、**〈この私〉**となっていくことを示しているだろう¹⁰⁾。

さらに言えば、ある〈他者存在〉と対峙している「私」と、別の〈他者存在〉と対峙している「私」が、はたしてまったく同一の「私」と言えるのだろうか。われわれはしばしば、いかなる〈他者存在〉との〈関係性〉からも独立した、不変で一貫性のある「純粋な私」というものが存在すると考えている⁽¹¹⁾。しかし「人間的〈関係性〉」の最小単位が「〈我-汝〉の構造」にあるのだとすれば、〈汝〉が異なれば、そこに現れる〈我〉もまた異なるものになりうるはずである。実際われわれは、ある人物の前では決して見せない「私」の“顔”があり、別の人物と出会って、これまで自身も知りえなかった新しい「私」の“顔”を知るといふことがあるだろう。このことは、いわば「〈我-汝〉の構造」というものが存在するだけ、「私」というものもまた存在しうるといふことを示唆しているのである⁽¹²⁾。

したがって以上を踏まえるならば、われわれが「私」だと認識しているものは次のように規定することができるだろう。すなわち〈自己存在〉とは、生物個体としての境界によって、身体という〈他者存在〉を内に含みつつも、生受において避けがたく数多の〈他者存在〉と結ばれることによって形作られてきた何ものか、そして無数の〈他者存在〉との間に、「〈我-汝〉の構造」を通じて無数の「私」として現れたものの総体、それをあくまで漠然と捉えたものである、というようにである。

さらに〈自己存在〉が、無数の「〈我-汝〉の構造」を通じて〈この私〉としてあるとき、それぞれの「〈我-汝〉の構造」は互いに影響し合い、〈この私〉に連なる“世界”を形作っているとも言える。例えば前述した吉田は、「メディア」を「あらゆる二者を介在するあらゆることともの」として捉えたうえで、次のように述べている⁽¹³⁾。

「きみが父の友人からのメールを読むとき、父の友人は父ときみをつなぐメディアになっている。メールも、写真もまた同様である。と同時に、きみにメールを送るという行為自体、そしてきみからの返信もまた、友人と父をつなぐメディアになっている。……そのとき、我々は互いにメディアとしての役割を交換しつつ交感している。それだけではない。きみがメールを読んで

いる場合は、きみが幼い頃から育った家であり、部屋だ。そのそこかしこに父の記憶が刻まれている。メールを打つPCは、数多くの（繰り返すが自然をも含んだあらゆる）誰かたちが材料を産みだし、収穫し、運び、精製し、デザインし、形成し、広告し、流通させ販売していまここにあるものだ。それらのすべての連なりの先に——あるいはこの瞬間の共振として——いま、このときが出現している」⁽¹⁴⁾。

つまり〈自己存在〉は、いまこの瞬間においても、この〈関係性〉の網の目を通じて「私」となっている⁽¹⁵⁾。そしてそれゆえ、瞬間的に出現するそれぞれの「私」は、確かに「私」ではあっても、一度として同じものではないとも言えるのである。本書では、この〈自己存在〉の背後にあって「共振」する無数の「〈我-汝〉の構造」を指して「〈関係性〉の場」と呼ぶことにしよう。

(3) 「人間的〈関係性〉」における〈間柄〉の概念

以上を通じて、われわれは〈自己存在〉とは何か、〈他者存在〉とは何か、そして両者をめぐる根源的な原理である「〈我-汝〉の構造」というものについて見てきた。しかしわれわれが前述した「中核的他者」、すなわち時空間を共有し、日々接触する「現存する顔見知りの人間」との間に〈関係性〉を成立させる場合、「〈関係性〉の構造」は、よりいっそう複雑な事態を考慮しなければならない。

試しにここで、ある人間存在が別の人間存在と接触し、そこで“ゼロ”から新たな〈関係性〉を形成していく場合を想定してみよう⁽¹⁶⁾。ここでの〈関係性〉は、まず互いが互いの存在について何も知らない状態から始まる。そのため両者が〈関係性〉を成立させるためには、互いに試行錯誤を繰り返すことによって、相手を知り、時間をかけて〈関係性〉の“意味”を構築していかなければならないだろう。ここには、「中核的他者」との〈関係性〉の複雑さが良く表れている。なぜならここで「相手を知る」ことが求められるのは、相手もまた「〈関係性〉の場」を背負い、〈他者存在〉に対して「〈我-汝〉の構造」を取